

2016 年度第 4 回 スポじんサロン (2017 年 1 月 28 日)

なぜ日比谷公園で鉄棒をするのか；個人的な理由を聞く

福地豊樹（群馬大学）

2004 年の夏、鉄棒をする奇妙な大人たちの映像がテレビから配信された。

谷 啓さんが進行役となり、鉄棒に関わるひとたちの物語が映されてゆく。東京の日比谷区のど真ん中にある公園の一角に集まるひとたち。懸垂 10 回 10 セットを目標にうなり声をあげるひと。大振り上がりに挑戦するひと。鉄棒をヤスリで磨き、逆手車輪をこなすひと。子どもに自分のカッコ良いところを見せようとするひと。それぞれの物語は、素直に面白と感じられた。同時に、何がこのひとたちを突き動かしているのだろうという疑問も生じていた。

昨年の体育学会の発表内容の再現で、恐縮だが、人類学を専門に研究活動を行っている方々に、ぜひこの現象に関するアドバイスをいただきたいという想いで今回の話題提供を行ってみたい。体育史が専門の者が立ち向かうにはあまりにも資料（史料）が見当たらなかった。聞き取りという方法にチャレンジしたが、平均的な聞き取り者はいなかった。ライフヒストリー（？）や他の社会学的な調査法を参照したが、その通りには事態は運ばなかった。素人の聞き取りに終始したと言える。

なぜ鉄棒なのだろうか。何を行っているのだろうか。何を目的としているのだろうか。なぜ、日比谷公園であるのか。なぜ、ひとりではないのか。なぜ、集まって、身体を動かすのか。集団（組織）を形成しているのだろうか。集団（組織）は規則を持っているのだろうか。この集団は組織といえるのだろうか。この集団はいつまで続くのだろうか。集団が変化することがあるのだろうか。ひとが離れてゆく時は、どんな時なのか。ひとが去っていった時、日比谷公園は日比谷公園であり続けるのだろうか。「場」を形成する論理とは何だろうか。広場の機能とは、本来どのようなものなのだろうか。

あまりにも分からないことが多く、明らかに出来たことは、あまりにも少ないと感ぜられる。

私が行った主な聞き取り調査や観察調査は 2014 年に行ったものである。2016 年 11 月に観察調査を行ったが、いくつかの変化が認められた。出来事の変化から何が語れるのか、継続して見てゆきたいと考えている。